

Rui Motooka

本岡 類

一億 二千万の闇





一億二千万の

岡類

Rui Mitsuoka

一億二千万の闇

一九九〇年四月二〇日 第一刷発行

著者 本岡 類

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二―二／郵便番号 一一二
電話 東京(〇三)九四五―二二二(大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

定価 一三五〇円(本体一三二円)

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。

© RUI MOTOOKA 1990 Printed in Japan

ISBN4-06-204826-4

(文2)

目次

プロローグ——三つの崩壊——	5
第一章 水曜日に来る悪魔——	19
第二章 社内殺人者——	52
第三章 愛人——	75
第四章 過去からの呼び声——	106
第五章 ウォーター・フロントの憂鬱——	144
第六章 三百パーセントのアリバイ——	184
第七章 勝手な時代——	227
第八章 最後の代償——	256

装帧／石川
勝

一億二千万の間

練馬で、また顔切り魔

三歳の幼児 襲われる

十三日午後五時すぎ、東京都練馬区東大泉七丁目の路上で、近くに住む会社役員戸野崎昌次さんの次男和彦ちゃん（三つ）が、中年の男に刃物で切りつけられ、額に全治三週間のけがを負った。

大泉署の調べによると、和彦ちゃんは近くの友人宅に遊びにいった帰り、自宅前で男から呼び止められ、振りむいたところ、刃物で切りつけられたもの。襲われたあと、和彦ちゃん

は自宅に逃げこみ、母親の直子さんが一〇番通報した。被害者が幼いため、犯人の面相、特徴は、眼鏡をかけた中年男といった程度のことしかわかっていない。現場は閑静な住宅街。

なお、練馬区内では、ちょうど三週間前の水曜夕方、大泉学園町七丁目に住む弁護士鈴木義明さんの長男洋平ちゃん（四つ）が近くの児童公園で、やはり眼鏡をかけた中年男から刃物で切りつけられ、額に全治二ヵ月の重傷を負っているため、同署では同じ犯人の犯行とみて、男の行方を追っている。

プロローグ——三つの崩壊

A

祭囃^{まつりばやし}を聞くと、なぜ、こゝも心が波立つのだろうか。太鼓や笛の音、神輿^{みこし}をかつぐかけ声が心——それも記憶の襞^{ひだ}を手荒くつかんで揺さぶるような気がする。

バスから降りて前方に目をやると、神輿の一隊が通り過ぎていくところだった。

警察官によって交通規制がなされた車道を、そろいの法被^{はろび}をまとった男たちがねり歩く。剃^ひき出しになった無数の足が、残照を受けて、ことさら輝いて見える。

なぜに心が波立つのか。昔から、幾度となく考えてみた。だが、記憶は氷山のように一角をのぞかせるだけで、肝心な部分は深い淵^{ふち}に沈みこんだままだ。

幼い頃。神輿が繰り出して、笛の音が流れる祭の日。何かが起こっている。

しかし、その何かが見えてこない。いや、正確にいうならば、具体的な形となってくれない。サッカーの試合を撮^とっていたテレビカメラにボールが当たり、ハンディ・タイプのカメラはグラウンド脇の土手を転がり落ちる。そんなハプニングを放映したテレビ番組を以前、観たことがある。

突然、サッカーボールが画面いっぱいに広がり、次の瞬間、画像が大きく乱れる。カメラが土手を転がり落ちるのだらう、画面は青い空、人の影、地面と、目まぐるしく変わり、最後は灰色一色となった。

それと同じように、記憶の画像は、背丈ほどもある植木、人々の騒ぎ、赤の色、母親の顔など三、四コマのシーンを、ごく断片的に明滅させるだけで、闇の世界となってしまう。

中学生の頃だったか、今は彼岸へ行ってしまった母親に訊ねてみたことがある。が、

「ヨッチャんは祭好きだったから、お神輿でも見に行つて、転んだんじゃないの」

そんな答が返ってきただけだった。

はつきりしないだけに、なおのこと心が波立つ。いったい、自分の身に何が起こったのか？

——時には、言いようもない不安に襲われて、胸が苦しくなったりもする。

彼は歩道に佇んで、しばらくの間、神輿の一隊を眺めていたが、やがてひとつ大きく頭を振ると、ふたたび歩を進めた。

少し行くと、薬屋がある。ほこりをかぶった緑色のカエルが店頭に立っている。

アルミサッシの引き戸を開けて、中に入る。

店内には、先客がひとりいた。彼と同じく背広姿の中年男で、買ったばかりの栄養ドリンク剤をのどに流し入れているところだった。

男が飲んでいるものと同種のドリンク剤を頼んだ。金と引換えに、よく冷えたガラス小瓶が一本手渡されたが、その場でキャップを開けることはせず、革靴の隅に押しこんだ。

薬屋より二軒先に、酒屋がある。

ここでも、彼は小さな買い物をした。ウイスキーのポケット瓶だ。

これで、明日のための買い物は終了した。あとは、ドリンク剤の中味をアルコール濃度四十三パーセントの液体に詰め替ればいい。

明日は重要な会議がある。重要な会議で、重要な報告をせねばならない。

三月はど前、会議直前にウイスキーを口にしてしていると、上司に目撃され、冷い視線を投

げかけられたことがある。

栄養ドリンク剤ならば、賞賛すべき企業戦士。ウイスキーとなれば、唾棄すべき敗残兵——いとも簡単にレツテル貼りがされてしまうのだから、会社というところは恐しい。

うす暗くなりかけた舗道を歩き、二百メートルほど行つたところで、また足を止めた。

こんなところに、居酒屋があつた？

アクリル看板の新しさから判断して、ごく最近、開店した店だろう。のれんの下から内部を覗いてみると、すでに半分ほどの席が埋まつている。

通り過ぎようと、彼は一步、自宅のある方向へ足を踏み出した。しかし、その足は一步だけで止まつた。

今日、彼はどこにも立寄らず、自宅へ帰るつもりだった。こんな早い時間に帰宅できるのは何か月ぶりかのことだったし、それに、なによりも、会議のための報告書をまとめなければならぬという仕事が残っていた。

しかし。彼は思った。帰るには少し早すぎるのじゃないか、と。

今日もしつかり働いて帰ってきたのだから、冷えたビールを一杯だけ飲んで帰つたって、罰は当たらないだろう。一杯だけで帰るのなら、報告書をまとめるにも支障は生じないはず。それに、女房の奴、こんなに早く帰宅するとは思ってもいないだろうから、俺の分の夕食は作ってないに違いない。

自分に対する「言い訳」がたてば、次の行動は自然決まつてくる。

彼は足よりも軽く、のれんをくぐり、カウンター席に尻を落ちつかせた。

「生ビール、大ジョッキで」

「つまみは何にいたしましょう」

「そうだな」

黒板に白墨で書きこまれた品書を、鶏小屋に忍び入った狐みたいな目つきで眺める――。

三時間の後。彼はまだ同じ場所にいた。

その間、なにがどうしたのか、記憶はさだかではない。たしかに三時間分の時は通り過ぎて行ったはずなのに、彼の頭の中ではすべての出来事が、ちょうどプレス機械にかけられた空カンのように、原型をとどめぬほど押し潰され、一つの黒い塊りと化していた。

しかし、失った時間の代りに、彼は充分な幸福感を得ていた。

会社も仕事も、恐くはない。会議用の報告書作りなんて、明日、会社に行ってからすればいい。俺は有能な管理職なんだ。

生ビールのジョッキから、いつの間にか変わってしまった日本酒の猪口ちぐちを口に運びながら、ひとりで悦に入る。

そんな時、また祭囃まつりはやしが聞こえた。

テレビだ。店内のテレビが、関西方面で行われている祭を放映しているのだ。

ふたたび、心が波立つ。不安と苛立ちの雲が湧いて出る。

酒の中に酔でも落としこまれた気分になって、彼はもつれる舌で怒鳴った。

「お、親爺、テレビを切ってくれ」

カウンターの内側で魚を焼いていた店の主人が、驚いたような顔を向けてきた。

「早く切ってくれよ、こんなもん」

対する答は思わぬ方向から返ってきた。

「おっさん、勝手なこと、ぬかすなよ」

背後からだった。

「なにィ」振返ると、テーブル席には三人の若い男がいた。その中の一人、髪を赤茶色に染めた男が続けて言う。

「この次、スポーツ・ニュースがあんだから、おっさん、大人しく見とけよ」

「うるせえや！」

手のほうが勝手に動いて盃が飛び、陶製のそれはビール・ジョッキに命中して、派手な音をたてた。

「野郎……」

顔にかかった飛沫を掌で拭いながら、赤茶髪の男が立ち上がる。

「ガキのくせして、大人に説教するんじゃない」

「つけ上がりやがって……」

「店の中で喧嘩するの、止めてください」主人の上ずった声。

「表に出ようや」

彼も椅子から立ち上がった。ことさらに右腕を大きくまわしながら、先にたって店を出る。

背後に複数の人間がついてくるのを感じたが、恐怖はまったくなかった。

居酒屋の右隣は駐車場になっていた。

その敷地内に入って、彼は初めて振り返り、

「おい、おまえらなあ——」

言いかけたが、言葉は最後まで続かなかった。胃のあたりに強い衝撃を受け、声帯からすべてが消し飛んだ。力が抜けて、膝から地面に頽くたれた。

衝撃は一瞬の間を置いて、苦しさに変わる。息ができない。

直後、脇腹に衝撃と痛み。はずみで、横倒しとなった。息ができない。酸素不足の金魚のよう

に口を大きく開けて空気を吸いこもうとしたが、そこに何か硬い物が突き入れられた。口中が不自然な形で変化する。

辛うじて口を閉じると、舌の表面が生温いほとばしりと陶器の破片のような何かを感じし——あとの記憶は、ひしゃげたまま。ただ、今まで体験したことのない苦痛がしばらく続いたあとで、救急自動車のサイレンが耳に入ってきたことを、かすかに憶えているだけだった。

B

次々に打ち出される鋼鉄の小球が釘に当たっては弾き飛ばされ、ジグザグの軌跡を作って盤面を落ちてゆく。

右掌で電動ハンドルを握った男の視線は盤面に向けられ、網膜上にはそんな玉の動きが映っているはずだったが、実際、心の中で彼が見ていたのは別の光景であった。

ほつれ髪の毛目立つ妻の顔。その少し浮腫んだ顔の中にある口が、まるで別の生き物であるかのように休むことなく動き、棘のある言葉を吐き出してゆく。

「ねえ、あんた、今日こそ、お義母さんにはつきり言つてよ、お義兄さんのところに行つてもらふつてこと」「もうすぐ二人目の子供が産まれるんだし、そのうちには正志だつて自分の部屋を欲しがるようになるわ。このまま、お義母さんに居つかれちゃったら、困るの」「なにも養老院に行けつてわけじゃない、実の子供、それも兄のほうが大きな家を建てたから、そちらに移つてほしいと頼んでるだけなの。あたしのどこが悪いの!」

彼がただただ沈黙を守っていると、パサッという乾いた音がして、読んでいたスポーツ新聞が眼前から消えた。

新聞は妻の手の中にある。抑えていた怒りの感情が鎌首をもたげた。

「な、なにすんだよ」

「あんた、あたしの話、聞いてんの」

「聞いているさ」

「だったら、お義母さんが帰ってきたら、言ってね。もう、ここには住めないんだって、パチンと宣告してやるのよ」

その言い方が癪に触って、

「お前……」

テーブルの上にあった湯飲み茶碗を右手で薙ぎはらうと、立ち上がり、うしろも振返らず自宅を飛び出したのだ。

今日だけの出来事じゃない。このところ、休みの日となると、毎回のごとく繰りひろげられる夫婦喧嘩だ――。

盤面から玉の動きが消えた。上皿に目を落としてみると、先ほど買った四百円分の玉はきれいに無くなっていった。これで、三千円が二十分も保たずに消えてしまったわけだ。

ズボンのポケットをさぐってみたが、百円玉は見つからない。給料日前だ、財布に残っていた最後の千円札三枚はすでに使っている。

腹が立ち、パチンコ台のフレームを平手で思いきり叩いてから、腰を上げる。若い店員が険しい目を向けてきた。

パチンコ屋を出た。行くあてもない。かといって、このまま自宅に帰る気にもなれない。

彼は自宅とは反対方向の道を選んで、あてもなく歩きはじめた。そして、歩きながら、また今朝の出来事を思い返す。

妻の言い分が誤りでないことは、充分に承知している。兄は一戸建ての家に住んでいるのだ。なにも、公営住宅の二DKで暮らす自分たちが母親を預かる理屈はない。

実際、彼自身、兄の家に行ってみてはどうかと、婉曲に勧めたことも何度かある。しかし、そんな時に返ってくる母の答はいつも、

「あたしや、ここがいいんだよ」

父の死後、この地に引越してきた母親は、今ではすっかり地区の老人会にとけこんでいた。ことに昔から好きだった民謡では会の中でも師匠格だとかで、なにか催し物があるたびに得意のノドを披露している。新しい土地に移れば、それらの交遊が絶たれることになる。だから、母は兄の家に行くのを拒絶しているのだ。

その気持は、彼にもよく理解できた。ゆえに「ここがいい」の言葉を聞くと、それ以上、話を進めることができなくなってしまふ。

もし、半ば強制的に兄の家に移すとなれば、妻が主張するような強い言葉を母親に投げつけなければならぬだろう。

彼は子供の時分から「母親っ子」だった。今の今まで、母とは諍い^{いさか}を起こしたこともなければ、反抗した記憶もない。そんなふうだったから、三年前、父親が病死したあと、すずんで母親を引取ったのだ。そうした自分が酷い言葉^{ひど}を投げつけられれば、それは心を傷つけるだけにはとどまらず、老いた人間の寄る辺を決定的に打ち砕く結果になりはすまいか。

だが、間もなく二人目の子供が産まれる。五人もの人間がああ狭い空間で暮らせば、ますますトラブルが増えることになる――。

悩みながら、迷いながら、十分も歩いたろうか、家を建てている現場に行きあたった。

二階建ての家で、完成間近なのだろう、内装の職人たちが部屋の中で働いているのが、開いた

窓から見えた。

隣家と接するように建てられている小さな家だったが、それでも二階部分はいっぱいに陽を受けている。

陽のあたる部屋。母親には、あんな部屋に住んでもらいたいものだ。寒がりで神経痛の持病もある母は、どんなにか喜ぶことだろう。

一瞬、思ったものの、それが無理であることは充分に承知している。

しかし、兄の家ならば——次にそう思った時、迷っていた心の振り子が一方に大きく振れた。足が止まる。

兄の家ならば、陽あたりのいい部屋だつてある。一時的に恨まれようが、自分の家から出てもらうことが、母にとってほんとうの幸せになるのではなかろうか。いや、そうに決まっている。友達にしたつて、新しい場所に行けば、また新たな交遊が始まるに違いない。

彼は、思った。いや、思いこもうとした。

ひとつうなずくと、踵を返す。決心が鈍らぬよう、余計なことを考えぬよう、自宅への道を速足で歩いた。

玄関から、ダイニングルームに足を踏み入れた時、妻は流し台に向かって食器を洗っていた。帰ってきた音が聞こえているはずなのに、振りむこうともしない。

「おい」声をかけた。「お袋に言うことにするよ」

腕の動きが止まり、妊婦服がゆっくりと振りむいた。

「言うって——」

「兄貴の家に行ってくれて、ね。今度こそ、はっきり言う」

硬かった妻の顔が、離れていてもそれとわかるほどに和らいだ。

「お袋は？」

「まだよ、帰りは夕方になると言ってたわ」

それから彼はテレビの前に座りこんだ。夕方になるまでの時間、いくつもの番組を観たはずだったが、そのいづれもまったく記憶に残っていなかった。

五時。定時のニュース番組が始まった直後、玄関の扉が開く音がした。

「ただいまッ、ああ、疲れちゃったよ。今日はねえ、歌え歌えて、続けざまに三曲もやらされちゃってさ」

はなやいだ声が近づいてくる。

お母さん、もうここには住めないんだよ——最後に告げることになるかもしれないこの言葉は胸の中で一度咬^{くさ}いてから、彼はテレビのスイッチを切り、立ち上がった。すべての思いを殺して、口を開く。

「お母さん、ちょっと話があるんだ」

C

腸内の内容物と肛門括約筋とが格闘している。内からの圧力と、それに耐えようとする力。電車が大きく揺れたり、他の乗客に押されたりするたび、後者が危地に陥る。

満員の車内で、彼は額に脂汗を浮かべて、ただ耐えていた。

次の駅まで、あと少し。もう二、三分の辛抱だ。そう自分に言い聞かせる一方で、今朝、自分のとった行動を後悔する。

彼は毎朝、出勤前、二度自宅のトイレに通うことを“決まり”としていた。それが今朝は遅刻